Śikṣāsamuccaya の梵文写本について

——成立と伝承において果たした学匠ヴィブーティチャンドラの役割——

佐々木 一 憲

シャーンティデーヴァの『学処集成』(*Śikṣāsamuccaya*:SS) においてはすでに 1902 年, C.Bendall によってケンブリッジ大学のライト・コレクション所蔵のサンスクリット写本 (K 本) に基づく優れた校訂本が Bibliotheca Buddhica (BB) の第一集として出版され, 今日でも SS 研究における主要な底本として用いられている。

SS には現在完本の写本が 3 種確認されている。その内訳は上述のネパール出土の K 本, およびロンドンのインディア・オフィスと, カルカッタのアジアティック・ソサエティーに保管されているものがそれぞれ一本ずつということになるが, 後二者は近代における K 本からの複写物であるから, 現存するオリジナルは結局 K 本ただ一本のみということになる。つまり, 近年の SS 研究はすべて, この 1 系統のみ伝えられたサンスクリット写本の情報の上でなされてきたものなのである。

この写本は本文の 9 割かたをベンガル文字を書く一人の筆写者 (第一筆写者) が書写し, 残りの 1 割ほどを, より古形を留めたブジモール体* の文字を書く筆写者 (第二筆写者) が書き写す形となっているのだが, 興味深いことに, 第二筆写者の書写部分の欄外にはところどころ, 第一筆写者の手になると見られる訂正・加筆の文字が見られる。通常欄外の記述は本文が書かれた後に施されるものだから, このことは写本が第二筆写者の作業のあと第一筆写者の手元に戻されたことを意味するだろう。よってこの写本の成立は, 双方の書体が混用されうる 12 世紀末から 13 世紀初頭のことだろうと推定される。

一方, 同写本はネパール写本によく見られる貝葉に似た外形を持つものであるが, これが何より特徴的なのは紙製だということである。Konishi[1990] によれば, 出土地ネパールにおいて紙への聖典の書写が見られるようになるのは早くてもせいぜい 14, 5 世紀, 紙が貝葉にとってかわり一般化したのはさらに時代を下って 16, 7 世紀以降のことだとされている。つまり, 紙に書かれているということから考えればこの写本は 14 世紀以前に成立したものと考える難いということになる。

のである。

SS 写本の出自に関するこの謎は Bendall も BB 版の解題において既に指摘しているところだが、彼もまたきちんとした解決案を示すまでには至らなかった。現在のところ「14-15 世紀成立」という、紙製であることを根拠に Bendall が下した一応の結論を追認する向きが一般的なようではあるが、この謎そのものは今日もなお解明されないまま残されているのである。

さて、この写本はネパール風の紙の上に主としてベンガル文字で書かれ、カトマンドゥから出土したものであった。紙に関して言えば、ネパール製とインド製とでは原材料や製造方法が全く異なるため、両者が混同されることはまずないと言ってよい。加えてインドでは貝葉が十分採取でき、聖典書写には貝葉を用いるという慣習も根強かったため、両地域は盛んに文物を交流させていたとはいえ、聖典書写のための紙がネパールからベンガルに輸入されていたということは考えがたいし、事実そうした例もこれまで報告されていない。したがって、ベンガル文字で書かれた写本ではあるものの、同写本はインドで成立してネパールに持ち込まれたものではなく、インド人の書き手がネパールあるいはネパールと同じ製紙法を行っていた地域で書いたものだろうと推測することができる。

前出の Konishi[1990] などによれば、ネパールの製紙法はチベットから伝わったものであり、その製造方法や素材はほぼ等しく、製品も外見的にはほとんど見分けがつかないといわれている。また、後代まで貝葉が一般的だったインドやネパールにおいてとは異なり、チベットでは早くから聖典を作るのにも紙が利用されていたといい、事実、Sāṅkṛtyāyana[1937] は 12, 3 世紀当時インドからチベットへと逃れた仏教僧達はこの地で聖典を書写するのに自由に紙を用いていたと報告している。そうした事例に照らせば、紙の上にベンガル文字で書かれるという特徴をもつ本写本も、それらと同様のケースとして、成立地をチベットと見ることも可能となりそうである。その場合、写本を書写しカトマンドゥにもたらした人物に見当がつけられれば、その推定をより確度の高いものとすることができるだろう。

ところで K 本のコロフォンにはこの写本の寄進者としてジャガッダラ・マハーパンディタ=ヴィブーティチャンドラという名前が挙げられている。この人物は BB 版の出版当時にはほとんど知られることのなかった人物のようであり、Bendall

もあまり注意を向けていないのだが、筆者は彼こそ上述の謎を解く鍵となる人物として注目すべきではないかと考えるのである。

Sterns[1996] などによってこの人物の経歴を概観すれば以下になる。ヴィブーティチャンドラは今日、シャーンティデーヴァの『入菩提行論』(BCA) に対する注釈書とカーラチャクラ・タントラの六肢ヨーガに関する諸典籍の著者として知られる論師である。

彼は12世紀、北東インド・ベンガル地方、ヴァレンドラの王家に生まれ、ヴィクラマシーラ僧院で正量部の戒を受けて出家し、後にジャガッダラ僧院に移って研鑽を積んだ。既にこの当時から彼は大学僧と呼ばれていたというから、コロフォンにあったマハーパンディタという敬称はこの頃から付されていたものと考えられる。

その後、ムスリム勢力の侵攻の難を避けて同院に身を寄せたシャーキャシュリーバドラに師事し、1204年、師に同行してチベットへと逃れた。彼はシャーキャシュリーに従った9人の弟子の筆頭に挙げられたという。一行はその後10年に渡って中央チベットの各地を錫巡するなかで、1209年の夏安居には師ともどもサキヤの地に招かれ、サキヤ派の氏族教団を率いるクン氏一族との親交を得た。一行は中央チベットでの最後の3年の夏安居をこの地で送り、その後ガリ地方のプランに移動する。ここでヴィブーティチャンドラは翻訳官シェーラプ・リンチェンとともに数年間、翻訳作業に従事することとなる。

その後彼は、カシュミールに帰る師と別れてネパールのカトマンドゥに赴き、アティシャの創建といわれるタム・バヒ、通称ヴィクラマシーラ寺院に止住して、僧院長として諸論典の講義と後進の育成にあたった。

しばらくして夢告を通じて引き合わされた密教行者のシャバリーパから、サラハに由来するカーラチャクラの六肢ヨーガの修法を伝授され、その伝統をチベットに伝え、その後数度チベットとネパールの間を往復し、最後にはカトマンドゥにおいて客死した、と伝えられている。

R.Sāṅkṛityāyana はチベットで数度にわたり梵文貝葉写本の調査を行っているが、1936年の二回目の調査に際して、サキヤ地方の寺院で大量の梵文貝葉写本を発見した。この時発見された貝葉写本のリストは Sāṅkṛityāyana[1937] に掲載されているが、そのなかには SS のコロフォン部分が書かれた貝葉断片なるものの存在が記録されている。この断片にはわずかに最終章の章題と SS という書名、そして

成立年代を示す奥書が残されているのみなのだが、その奥書の記述から、我々は同貝葉写本が 12 世紀の中頃にベンガル地方で成立したものだということを読み取ることができる。

ここで先に紹介したヴィブーティチャンドラを思い起こしてみると、彼はまずベンガル地方に生まれ、入蔵以前にはベンガルのジャガッダラ僧院で活躍した人物であった。またサキヤで写本断片が出土したところの SS は、彼自ら注釈書を書いた BCA と同じシャーンティデーヴァの著作とされ、かつヴィブーティチャンドラの BCA 解釈にも大きく寄与するものでもあったから、彼がその写本を常時携行していたとしてもおかしくはない典籍である。加えて、先に見たように彼はこのサキヤの地に数度滞在していたことも知られているのである。

また、先の論文は別に、サキヤ近郊のシャル寺で発見された『プラマーナヴァールッティカ複註』(*Pramāṇavārttika-vṛtti*) の紙製写本の末尾にヴィブーティチャンドラ直筆の詩節があるとして、彼の筆跡の写真とともにこれを紹介しているのだが、これはヴィブーティチャンドラ本人がサキヤの地で貝葉写本の書写作業に積極的に加わっていたことを示す証拠と見る事が出来るだろう。チベットという地域性を考えれば、このときの書写は当然貝葉から紙へという方向で行われたと考えられるし、出土地のシャル寺はサキヤ地方に位置し、プトンが止住して以降は宗派的にもサキヤ派に接近したといわれるから、このことを前述した SS の貝葉写本断片がサキヤの寺院から出土したと考えあわせれば、SS 唯一の現存写本である K 本が、当時まさにこの地でヴィブーティチャンドラその人の手によって書写成立したという可能性も十分考慮に値するものとなるように筆者には思われる。

さて、ヴィブーティチャンドラはサキヤを離れたあとと師と別れてカトマンドゥに赴いている。このことと K 本に寄進者としてその名が明記されていたこととをあわせて考えれば、同写本をかの地にもたらしたのもヴィブーティチャンドラその人であったと考えるのが自然であろう。そして、ヴィブーティチャンドラがチベットに入り、師に従ってサキヤ地方を含む中央チベット一帯を巡廻したのはまさに 13 世紀の初頭のことであったが、これは Bendall が書体の特徴をもとに推定していた K 本の成立年代とも見事に一致するのである。

以上見てきたように、この写本の出自に関する謎については、ヴィブーティチャンドラをその成立と伝達に関わる人物と仮定することによって一つの合理的

な説明を与えることができる。本写本においては、用紙とそこに書かれた文字との示唆する地域と年代とが一致しないなかで、Bendall は紙の示唆する年代を重視し、その紙も出土地のネパールのものとみた上で写本の成立を 14-15 世紀としたのであるが、著者はヴィブーティチャンドラという人物とチベットの製紙法についての知見を新たに考察に加えることで、この写本についてはむしろ書体の示唆する年代の方を優先し、その成立を「筆写者および伝達者」ヴィブーティチャンドラがチベットで活動した 13 世紀初頭とすべきことを提案したいと考えるのである。

* 発表時点はこれを Bendall の記述にならない「ランツァ体」としていたが、ここでは堀伸一郎先生のご指摘により「ブジモール体」と改めた。

† 現在カルカッタの Asutosh Museum に保管されている *Pañcarakṣā* の写本はインド出土の、成立年代を確定できるネパール紙製写本 (12 世紀) のうち最古のものであるが、これは例外的に古いものとされている。しかもこの写本ですら成立地はネパールと見られており、インドに紙が輸入されて書かれたものではない。13 世紀になるとイスラムの征服により仏教関係の人や物はベンガルからネパール・チベットへと一方的に流れることになったため、ネパール紙製の仏典がインドで成立する可能性は一層低くなったと考えられる。

‡ 主観に類することでもあるので確言はしかねるが、K 本の第一筆写者の筆跡はこの写真の筆跡に酷似していると筆者には思われる。

〈参考文献〉

- Konishi A.[1990]:“Old Paper Used for Asutosh Museum Manuscript of *Pañcarakṣā*.”, *Journal of the Japanese Association for south Asian Studies*, No.2.
 Saṃkrtyāyana, R.[1937]:“Second Search of Sanskrit Palm Leaf Manuscripts in Tibet”, *Journal of the Bihār and Orissa Research Society*, 23.1: pp.1-57.
 Stearns, C.[1996]:“The Life and Tibetan Legacy of the Indian mahāpaṇḍita Vibhūticandra”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 19.1, pp.127-171.

〈キーワード〉 Śikṣāsamuccaya, Śāntideva, 写本, ヴィブーティチャンドラ, 紙, ネパール, チベット

(東京大学大学院研究生)

The reason that Nanjio identified Ch'ing-mu with Āryadeva was that he relied completely on the English translation by S. C. Das (1882) of the Tibetan doxography *Grub mtha' shel gyi me long* (*A Crystal Mirror of Siddhānta*). But the original has "blue-eyed *ācārya*" (*slob dpon mthing mig can*), and there is no mention of Āryadeva. Das presumably thought that the blue-eyed *ācārya* referred to Āryadeva. This means that the thesis identifying Ch'ing-mu with Āryadeva was invented by Das and has no basis in source materials. Furthermore, according to Coblin (1994), the character *pin* 寶 can be used to transcribe *pin(g)-*, but not *vim-*, *vin-*, *bim-*, etc., and the character *chia* 伽 is not used to transcribe *-kkha* or *-kṣa*. In other words, when considered from a phonological point of view, the form Pin-lo-chia for Vimalākṣa is untenable, and the form Pin-chia-lo, equating with Piṅgala, is more probable. If this is the case, then the arguments of Walleser (who suggested *vim-*) and others such as Robinson and Bocking lose their foundation.

169. On the Sanskrit Manuscript of the *Śikṣāsamuccaya*; Vibhūticandra as the scribe and the transporter

SASAKI Kazunori

To date, a unique Sanskrit Ms. of Śāntideva's *Śikṣāsamuccaya* has been found in the Wright Collection, now preserved in Cambridge University Library. Although the critical edition of this text was published by C. Bendall as early as in 1902, some of the characteristics of this Ms. have not yet been made clear, especially with regard to the date of its copy. From his discussion on both the colophon of this Ms. and the life history of Vibhūticandra, the present author draws the conclusion that the Ms. was copied in all probability in the beginning of the 13th century by Jagaddala Mahāpaṇḍita Vibhūticandra, whose name, as the contributor of this Ms., is found in its colophon. The same Vibhūticandra is most likely to have copied the Ms. at Sa skya region and brought it later into Kathmandu where the Ms. was found.

170. Quotation of *Daśabhūmika Sūtra* in the *Madhyamakāvatāra*

KANAZAWA Yutaka

Candrakīrti provides an interpretation of the term *cittamātra* in his *Mad-*